中国の水神について

―二郎神の成立―

愛甲直宏

水神。水にまつわる神の事を指す。中国においては河神・湖神・海神・濤神（潮神）の総称である。その中でも河神は、個々の河それぞれに神がおり、その対象とされる個々の河の違いからその地域性に密接な特徴を持つ。当論文で取り上げた二郎神もその河神の一人であり、四川省にある都江堰と呼ばれる水利施設から発生した。この二郎神の由来については未だ明確ではなく、定説というものがない。また、そもそも二郎神がどのような神であるのかというはっきりとした形態も掴み難い。そこで、以下二郎神のモデルといわれる人物、二郎神の成立、信仰の隆盛について検討することで、古くから信仰の対象とされてきた二郎神の姿を確認することが本論の目的である。

第一章では、二郎神のモデルといわれる人物を検討した。二郎神は出自の明確でない神であり、その由来とされる人物については諸説あって一人の人物に特定できない。これも一つの特徴である。本章では李冰・趙昱・李二郎・楊戩という、モデルとして有力とされる人物を取り上げ検討した。

まず、李冰は最古の説で、紀元前二五〇年頃の実在の人物である。『史記』や『漢書』によれば蜀地方で水利事業

に功績があり、その結果が現在に続く都江堰である。この功績が称えられ後世信仰の対象として祀られるようになるのだが、彼については他に『風俗通義』に江水の神との神話が記述されており、ここから自然崇拝と李冰を結び付けた民間の考え方、そしてどのように信仰がされていたかというものが窺える。

趙昱は、隋の煬帝の時に嘉州太守を拝した人物で、民に害をなす老蛟を退治したとされる。『龍城録』に詳しい記録が残っているが、その中で特に「兄冕」の存在がみえることから、趙家の次男坊として呼ばれていた可能性が二郎神の「二郎」と関連する特徴として注目される。また、二郎神の道号である「清源妙道真君」は北宋末、趙昱に与えられたものであった。なお、李冰との関連性については記録にはみえず、この趙昱が行った功績である「老蛟を退治した」という共通点から混合されたものであろうと思われる。

次に李二郎だが、李冰に従って水利工事を行った人物とされるが、彼につてい言及したのは朱熹が初めてである。『夷堅志』には開封の二郎神廟に関する記述があるが、そこには朱熹が「許多霊怪」と記した事件であろうと思われる記事が載っており、灌口廟から派遣されたという小児が開封に現れ神保觀を建てさせたとある。この子は李冰の次男の現神と考えられ、後には二郎神と捉えられて李冰とともに神保觀を享受することとなった。

最後の楊戩は、俗説において最有力な人物である。同姓同名の人物が北宋末に存在したが、この人物は非道な行いをしたという性格からその人物が直接モデルになったとは考え難い。むしろ『西遊記』や『封神演義』がモデルとしたであろう楊戩という人物に付加された性格と二郎神が関連する説話から、民間に流布するに従って混同されていったものと考えられる。

第二章では二郎神の成立をふまえ、その信仰の開始と隆盛を検討する。

まず第一節では二郎神の成立を考察した。二郎神の最初の流行を示した史料として『東京夢華録』があり、そこには神保観における二郎神の生誕節に関する詳細な記述が見える。但し、そこには「灌口二郎」と記述されてはいるが、「神保観」という名称が示すようにそこには「二郎神」の名称は廟名には反映されておらず、そのことから『東京夢華録』や『事物紀原』『夷堅志』の成立以前には「二郎神」の名称は未だ確立されていなかったと思われるのである。従って、「二郎神」の成立はこれらの書物の成立した北宋末から南宋に移る間あたりであったと考えられる。

さて、『夷堅志』には「二郎廟」の他に「崇徳廟」「灌口廟」といった複数の名称がみえる。これらは、「二郎神」の成立以前にその信仰の主な対象が李冰であった為であろう。これに対して、後の明代の地方志に一般的に「二郎廟」の名称がみえるようになると同時に、「清源廟」や「川主廟」といった言葉が見えるようになるが、それは二郎信仰の流布とともに趙昱や李二郎の要素が混在していった結果であろう。

遡って、二郎神にまつる蜀地方の李冰信仰について検討すると、それはかなり根強かったことがわかる。『風俗通義』に壮健な者を「冰児」と名付ける習慣が記述されていることや、一九七四年に都江堰で出土した後漢の時代に作成され、沈められた李冰像がそのことを示している。李冰はその治水に関する業績から鎮水神として信仰され、都江堰の灌口の廟に祀られた。そのことは唐の史料から窺えるが、北宋に至ると下封や廟の修理に関する記事がみられ、南宋にも李冰親子への祭事が盛んであったことが書かれている。従って、後漢から南宋にかけて蜀地方では灌口にあった崇徳廟を中心に熱狂的な李冰信仰が継承されていたことが言えるのである。

なお、李冰とその子供に対する信仰の分化については南宋にその萌芽が見られるが、開封では灌口から派遣された小児に対する信仰が存在したものの、蜀地方では依然李冰に対する信仰が行われていたのであって、その分化が認知

されるのは更に時代を下るのである。

次に第二節では、二郎神信仰の民間への流布についてを考察した。小説や講談、戯曲といった芸能が人間に与える影響力はいつの時代でも大きいものだが、二郎神に関する内容も例外ではない。元曲には二郎神を扱ったものが幾つか見え、その流行範囲がどのようなものであったかは明らかに出来ないものの、二郎神にまつわる説話が元代に雑劇という形にまとめられていたことがわかるのである。

また、小説では有名な『西遊記』と『封神演義』があるが、これらが二郎神信仰に多大な影響を及ぼしたことは諸説一致しているところである。しかし、それらの成立する以前に、二郎神（楊戩の名称も含む）は登場しないものの、その物語の下敷きとなるような作品が既に元・明代に成立している。また、明代には実際に全国的に二郎神廟が次々と建設されていた。そこで、上記二作が成立する以前に、具体的には明代中期には諸神に関する説話が完成・流布し、二郎神についても既に講談などの手段によって民間の人々に広く認識されていたのではないかと推定したい。

第三章では、地方における二郎神信仰について検討する。

まず第一節では、二郎神の職能について考察する。二郎神の主なモデルとなった李冰・趙昱・李二郎はいずれも水に関する事項での功績で有名であり、二郎神も当然その性格を継承したものと思われる。都江堰はもちろん水との関係は深く、よってそこで祀られていた神（李冰）も水神としての性格を持っていたと推定される。しかし、開封で信仰された二郎神は水に関係した性格を見出せず、むしろ武神としての性格が色濃い。つまり、洪水など、水が生活に密接に影響する地域からあまり関係のない地域に廟が建設されることによって、そこに住む人々は二郎神の「水神」としてのその職能を「その地方に即したもの」に変化させたのである。更に、初めは国家によって信仰が保護されて

いたのが次第に民間に移行してくると、様々な職能が付加されてくる。それは、酒屋の神であったり、疱瘡の神であったり、子供を保護する神であったりして、都市に生活する人々により密接な利益をもたらす神として信仰されてくるのである。このように、本来の神格を喪失しながらも環境に順応した神格を新たに保持したことは、民間における二郎神への信仰を不動のものとした。

第二節では、地方志にみえる様々な名称について検討した。二郎神の廟は明代以降、全国的に分布しているが、その名称は様々で「二郎祠」「清源廟」「川主廟」などがある。これらの違いは、祀られている神が二郎神を主神としたものではなく、李冰や趙昱、李二郎といった人物が主神として祀られているためではなかろうか。確たる記事は無いものの、李冰を主神に据えていたとされる「川主廟」や「李冰祠」、元代に李二郎へ贈られた封号をもつ「昭恵霊顕真君廟」、宋代趙昱に贈られた封号をもつ「清源（妙道真君）廟」が存在し、これからするとそれぞれの人物が祀られていてそのことが反映していると考えられるのである。但し、後二者は「灌口神」や「灌口二郎神」と曖昧な表現で記述されており、「二郎神」という神は「どのような人物が神になったのか」という解釈が地方によって様々で、人々の間で雑然と認識されていたであろうことを物語ると思われる。

また、多様に変化した職能によって名称が左右されたとも考えられるのだが、そのような事例は見えず不詳であった。

以上、二郎神信仰についての考察を進めてきたが、二郎神が複数の人物をモデルとしていたり、職能も多様であるという点が変わらぬ特徴として見出せる。このことは、二郎神の姿を曖昧なものにする要素として今までマイナスのイメージで捉えられてきたが、結果的には二郎神の信仰を継続させた好要因として見直すことも出来るのではないだろうか。